
東方アンチが幻想入り Trash into trash

輪舞曲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方アンチが幻想入り T r a s h i n t o t r a s h

【Nコード】

N 3 3 9 0 W

【作者名】

輪舞曲

【あらすじ】

主人公の趣味は東方が好きな人を”東方厨”として掲示板で煽り、バカにすること。そんな彼が幻想入りしたら…というお話。決して最強になんかならない、決してキャラに好かれたりしない、決して綺麗ではないし楽しくない。しかし他のどこにもない小説です。

テンプレな東方のオリ主二次創作小説に少し飽きたと感じている人にお勧めです。もちろんその他の方も是非お読みください

だいいちわ

「フンフフーン」

カタカタとキーボードを打つ音だけが響く

『気持ち悪いんだよ。これだから東方厨は…』

「送信、つと」

しばらく待ち、リロードする。俺の煽りに釣られてるバカがいる
鼻歌交じりにキーボードを打つ

『ゆとり乙ww クズは巢に帰ってろw』

送信っ！まったく気分がいい

今度は何だ？

” 東方の世界観は深いよ。確かに全く関係ないところで東方を出す
やつも悪いけどお前もすぐ決め付けるなよ”
だつてさ。何様だよ。鼻で笑いながらキーボードを打つ

『世界観（笑）wキメエww 適当に描いた同人でばろ儲けおいしい
ですか？wおめえも気持ち悪い東方厨なんだよw氏ねクズw』

すぐさま送信し、これだけじゃ満足できないのでスマホを取り出し、書きこむ

『どうしたの？「世界観は深い」んだろ？wなんか言ってみるよw
マウスを持つ手が震えてるぞ？w』

しばらくするとそいつから”覚えてるよ”と書き込みがあったので、
『涙ふけよw』と煽ると返事をしなくなった
ああいい気分だ。もう一度リロードするとまたそいつの書き込みがあった

”ここ行けばたぶんお前の考え方も変わるぞ↓<http://gensokyo.yakumo/>”

思わず笑ってしまった。ここまで反応してくれるバカがいるとは。
ブラクラの可能性を考えずに反射的にクリックしてしまった。今思うとブラクラどころで済んでいたらまだ良かった
クリックした瞬間視界が暗くなった。何も見えない。体の力もなくなってきた

薄れ行く意識の中、よくよく考えると明らかにURLがおかしかったのを思い出した

意識が覚醒する。寒い。それと背中に草の感触がする

目を開ける。…暗い。三日月が小さく光っている

立ち上がる。どこまでも広がる山。暗くてよくわからん

スマホも…圏外だ。やべえどうしよう。夢か？どこだここは何だこれは

よく整理してみよう。確か東方厨を煽って…URLをクリックして…
…ここに来て…
考えてもわからず、俺は何時間もただそこにつっ立っていた…

だいいちわ（後書き）

要請があれば続けるよ

要請がなければ続けないよ

だいにわ

「はあ……」

澄んだ空気や綺麗な自然をいつまでも堪能したいが
いつまでもつつ立っているわけにはいかないのはわかっていても
りだ

とりあえず人を探さないと…

「あれ、こんなところでどうしたんですか？」

「うわっ！」

まさかこんなすぐに人に会えるとは思わなかった。だがひとつ大きな問題がある

俺はものすごく『人と話す』のが苦手ということだ

しかも相手は声的に女性っぽい。俺は女性の目を見られない上にキョドってしまう

逃げ出したくなる衝動を抑えて振り返る

…なんかのコスプレか？髪を緑色に染めていて（カツラかもしれない）髪には蛇と蛙の髪飾り

明らかになにかのアニメのキャラクターの格好をしている。

「どうしたんですか？」

「あ…あの…」

ヤバイ。うまく喋れない。異性と話すのなんて何日、いや何ヶ月ぶ

りだろう

相手は高校生くらいのコスプレ少女なのに

「里の方ですか？それとも外来人ですか？」

「あ…えつと…あの…」

ヤバい。まさかこんなことになるとは…。前より酷くなったな…ハハハ…

「おーい、どうした早苗…ん？」

「あ、謙也くん。こんなところに人がいましたので」

声がした方を見ると”謙也”と呼ばれた青年（かなりのイケメン）
が手に提灯ちしんを持って立っていた
何故提灯…？江戸時代じゃあるまいし。などと思っていたら僕に会
釈してきたので俺も軽く頭を下げる

「まあこんなところで立ち話も何ですから一度神社の方に行きま
しょう」

「もう謙也くん！勝手に決めないでください！」

「あはは悪い悪い」

なんだろう。すごくイライラする。まあここでこの人達から離れる
わけにも行かないので後をついていく

「おじさん、もしかして外来じ…えつと、どうやってここに来たか
覚えてますか？」

「お、覚えてないです」

”おじさん”か…これでもまだ30歳なんだけどな

「…詳しくは神社のほうについてから説明しますが、ここはおじさんがいた世界とは別の世界なんですよ」

「…は？」

思わず立ち止まってしまった。ラノベじゃあるまいし何言ってるんだこのコスプレ少女は

「ははは、信じれないのも無理は無いですよ。僕だって最初は早苗のことをおかしい人を見る目で見てましたから」

「謙也くんはいちいち突っ込まないでください！」

「はははは」

早苗…というのはこのコスプレ少女の名前らしいな。それにしても眼の前でこうイチャイチャされるとムカつくな…

「着きましたよ。ここが私が風祝…巫女をしている守矢神社です。どうぞ入ってください」

「はあ…お邪魔します」

「あれ？早苗、神奈子と諏訪子は？」

「地底の方に行ったってさっき言ったじゃないですか！」

「はは忘れてた忘れてた」

なんの話をしているんだろうか？諏訪湖？とするとここは長野県なのか？

「それじゃこの世界について詳しく説明します」

「お、お願いするよ」

「…はい。ここは”幻想郷”と言って人間と妖怪が共存する、外と

は隔離された世界なんです。それで——」

説明を受けているが…電波すぎる…逃げたい…。ん、待てよ？”幻想郷”ってどこかで聞いたことあるような…

「——というわけです。まあ簡単にいえば”異世界”みたいなものです。外の世界とは少し繋がっていますけど」

「”異世界”ね…」

「ははは、信じられなくて当たり前つすよ。で、普段は結界で隔離されてるんですけど

何かの拍子でこっちに迷いこんじゃうことがあるらしいんですよ
そうして来た人を”外来人”と言っらしく僕もあなたもその一人
なわけで…はは」

「なるほどね…」

とても信じられる話ではないが、こんな状況なので頭に入れておこう

「そうだ早苗、あれ見してやれよ。弾幕」

弾幕？

「あ、そうですね。見てください」

「はい…」

「秘術『グレイソーマタージ』！」

またどうせ何かのキャラクターの…えっ
本当にビーム(？)らしきものが出ている！

「これで信じていただけますか？」

「…いやでも信じざるをえないから」

とりあえず摩訶不思議な状況だということは理解できた

「あの…帰ることはできるんだよね？」

一番気になっていたことを聞く。帰れないとヤバイじゃないか

「大丈夫ですよ。麓の方に”博麗神社”という神社があつて、そこから帰れます」

博麗神社…？これもどこかで聞いたことがある。確か最近…

「今日はもう夜なので、明日連れていきますよ」

「あ、ありがとう」

「おーい早苗ー。風呂の準備できたぞー」

「はーい。じゃあお先に失礼します」

「う、うん…」

女子高生くらいの子の後に風呂にはいるのか…

「ん？おじさんどうしたんですか、口を歪ませて。…あ、まさか」
「ち、違うー！」

違うんだ青年！決して俺はそんなやらしいことは

「ははは、まあいいですよ。ところでどうです？一緒に酒でも」

「…え、いいの？」

「こっちから誘ってるんすから。早苗は酒は得意じゃないし神奈子も諏訪子も今日はいないし…」

あ、神奈子さんと諏訪子さんってのはここに住んでる神様です。
今日はいないですけど」

”諏訪子”って人名だったのか…って神様！？聞くのもめんどくさいスルーするか

「だからちようど酒を呑む相手もいなくて暇だったんですよ。さあ、どうぞどうぞ」

「ああ、よろしく」

青年が酒を注ぐ。なんか喋ってたら慣れてきたな…。最低限のコミユ力はあるて良かった。青年が話しやすい雰囲気だからかもしれない

「さあ、乾杯…」

ここでスマホが鳴った。とっさに席を離れて電話に出る

「はい、もしもし…」

あれ？出ようとしたら切れた。なんだよイタ電かよ…
ん？そういえばさっきは圏外だったのに何故通じてるんだ？

「いやーははは、すいません」

「？」

何故か青年が謝ってくる。

「何で君が謝るんだい？」

「いや…実は僕、『回線を繋ぐ程度の能力』の持ち主で…はは」

「『回線を繋ぐ程度の能力』？」

全く意味が分からないが…この言い回し前にどこかで…

「えーっと…まあ詳しく説明しますよ。この『幻想郷』にはそれぞれ能力を持つてる人や妖怪がいるんすよ

例えば早苗の場合は『奇跡を起こす程度の能力』つつつて、ものすごいアバウトだけどまあ奇跡を起こすことができるんですよ

それで、僕の場合は『回線を繋ぐ程度の能力』つつつて、僕の半径1メートル以内ならたとえ圏外でも電話やインターネットが繋がるんすよ」

超能力まであるとは、こりゃたまげた…。異世界人に超能力者とくればあとは未来人ってか

「だから今おじさんが僕から離れちゃったから回線が切れちゃったですよ、ははは」

「なるほど…ん？ちよつと待って。一つ気になったんだけどさ、君はさつき『僕も』外来人”で”って言ってたじゃないか

何で、その…能力を持っているんだ？」

さつきからの会話、文面だけ見るとかなり厨二な内容だな…

「はははは、なんか最初から持ってたらしいんですよ。でも外の…元の世界では普通こんなこと気づかないでしょ？」

「まあ…」

未だに全部信じてるわけじゃないけどな

「謙也くんー、出ましたからどうぞ入ってください。おじさんもどうぞ」

風呂を終えた早苗さん（呼び方をコレで決定）が浴衣姿でこっちに
来た。どうやら緑髪はカツラではないようだ。染めてるんだろうか
それにしても…石鹸の匂いとこの年代の女の子の独特の良い匂いが
混ざってなんとも…おっと、危ない危ない

―

「へーおじさんは東京に住んでるんすか。都会いいですねー俺は外
にいたときは山梨に住んでましたから」

風呂の中、青年と談笑している

「そんなにいいもんじゃないぞ。人は多いし空気は汚いし。それに
してもここは本当に空気が綺麗だね

”昔の日本のような世界”ってあながち嘘じゃないかもね」

「はは、嘘じゃないですよ。…あ、そうだ。おじさんってゲームと
かラノベとか好きですか？」

「…まあ好きだよ」

それ以上に掲示板を荒らしたり東方厨を叩いたり煽ったりするのが
趣味なんてとても言えない

「…”萌え”とかフィギュアとか興味ありますか？」

「…あ、ああ」

ストレートに聞くなよ…。答えるの恥ずかしいなおい

「よし、じゃあ超重要な話を教えちゃいますよ。いやーはは、誰か
に言いたかったけど

幻想郷の連中に言うわけにもいかなかったんっすよねー」

「う、うん…」

なんなんだろうか。この世界についての説明はもうすでに早苗さんから教えてもらったけど

「じゃあ言いますよ。あ、決して他のやつにこのことを言わないでくださいね」

「ああ」

「実はですね…この世界、『東方Project』っていう同人ゲームの世界なんですよ!」

だいにわ（後書き）

ボロクソ叩かれて、要請なんて来るはずないと思ってたのにまさか3人もの方から来た。本当に感謝です。

なので、この小説は続けることにします。大まかな流れは決めましたので、これからだいたい週一で投稿しようと思います。

ただ、やるからにはどうしても主人公に人間性を持たせなければならなかったため、少しタイトルの”東方アンチ”が薄れるかもしれませんが。

（重要なキーワードには変わりありません）

あと、この小説は多少ギャグを交えつつですが、出来る限り現実的でいきたいと思います。（早苗の髪の毛の色に主人公が突っ込むなど）

「（自称）平凡な主人公が幻想入りしてチート能力持ってハーレムを築く」といったテンプレはまったくありません。むしろテンプレをぶっ壊していきたいです。

もちろん、ストーリー上、多少のご都合主義（本来ならあのまま主人公は野垂れ死ぬか妖怪に食われてたはずなので）はあります。今回オリキャラが出てきましたが、オリキャラは多くても4人くらいまでに留めたいです。

普通の、無難な結末で終わるつもりはさらさら無いので、ぜひ最後まで付き合っていたけるとありがたいです。

ご意見・ご感想などはコメントの方へお気軽に。

だいさんわ

「実はですね…この世界、『東方Project』っていう同人ゲームの世界なんですよ!」

「えっ!?!」

一瞬、自分が東方厨を煽ったりしてる事がばれたと思ったがそうではないみたいだ

いやいやそれよりどういう事だ!?!この世界が『東方Project』の世界!?

「その様子だと知ってるようですね。くー、ははは、やっとこの事を話せますよー

これまで言いたくても言うわけにもいかず自分の中でツッコんでたんっすよねー」

…まさかリアルで東方厨と会うことになるとは。だけど逃げるわけにも行かないし

リアルで罵倒できるほど勇氣はないし…この青年は悪いやつじゃないさそうだし…

「僕、幻想入りしたとき、おじさんと同じように早苗に幻想郷について説明されたわけですよ

でもその時はただ泊めてもらうだけですぐ出ていったんです。せっかく東方の世界なんですから全部見てみたいじゃないですか!

その後紅魔館に行って、レミリアやフランに殺されそうになったり咲夜にはうっかりPADって言っちゃって大変なことになったり白玉楼でも妖夢に変質者と間違われたり幽々子にバカみたいにたくさんの料理作らされたり…」

いきなりものすごい勢いでしゃべりだしたよこの人…。思わず一步距離を取る

「——それで、結局守矢神社に戻ってきて居候することになって…あれ？聞いてます？」

「あ、ああ…」

どこまでが本当の話なんだろうか。あと、言ってることがよくわからない

「いろいろ質問したいけど、まずいつからここにいるのさ？」

「最初に幻想入りしたのは一年くらい前ですね。ここに居候するようになったのは8ヶ月前くらいからじゃないですか？」

「かなり長いな。家族とか心配してないの？」

俺がそう言つと、青年は少し表情を変えた

「俺の両親は…いや、俺は捨て子なんすよ。だから施設で育ちました」

「そ、そうだったのか…」

「中学を卒業すると同時に一人暮らしを初めてバイトしながら定時制の高校に行つてたんですよ

それで友達の家遊びに行ったときに東方を知つて、そつからハマつて小説とか漫画とか同人誌とか読んだんすよね

貧乏ですから友だちから借りたりネット上の二次創作とかがメインでしたけどグッズもそれなりに買いましたよ

コミケや例大祭にも行つてましたし。だからまさか東方の世界に行けるとは思いませんでしたねー」

かなり苦労してるんだな…。俺なんて高校時代遊び呆けてたぜ？

「もしかして失踪届とか出てるんじゃないか？あと、帰ろうとは思わないのかい？」

「ははは、帰りたいと思わないって言ったら嘘になりますけど、おそらく紫が何とかしてくれてますよ

外の世界では俺の存在はなかったことになってますし」

”紫”とはなんのことだろうか。まあ突っ込むの面倒だしいいか…

「それにこの世界は居心地がいいですからね。自然も豊かだし東方キャラとも触れ合えるし！なんつって…はは」

「…」

一度青年の言ってることを整理してみよう。青年いわくこの世界は東方の世界らしい。まずこんなことは信じられない

第一にこの世界は自然が豊かで空気も澄んでいてとても綺麗だ。とても東方厨のイメージのような気持ち悪い世界ではない

だが早苗さんはあきらかにアニメか何かのキャラクターだ

最初はコスプレかと思ったが、（神社の大きさを見る限り）本物の神社の巫女が髪の毛を染めるなんてことは常識的に考えてありえない変なギャルとかなら髪の毛を緑に染める人もいるだろうが早苗さんは見る限り至って真面目そうだ

「…あれ？まだ信じてないっすか？東風谷早苗に守矢神社に洩矢諏訪子に八坂神奈子ですよ？すぐわかるじゃないっすか」

「…ごめん、実は内容は詳しくは知らないんだ」

よく考えてみると俺は東方の内容や設定を詳しくは知らない。知っているのといえ、どこの動画や掲示板にもしゃしゃり出てくる幼

稚さと

東方厨はバカだから見境なく金を使い、中学生レベルの絵を描いて儲かってる同人屋や

どれも同じにしか見えないキャラクターや同じにしか聞こえない楽曲や、何が凄いのかわからないのに

東方厨から神と崇められて天狗になってたりクソ同人を見て見ぬふりをしている原作者などおかしな業界だということだけだ

「そうですか…。でも本当に面白いですよ！世界観が本当に深くてですね…あ、そうだ、ちよつと聞いてくださいよ！」

「ど、どうした」

「おじさんが来るちよつと前の話なんですけど…ほら、さっき言った『回線を繋げる程度の能力』を使ってネットやってたんすよ

あ、パソコンはちよつとある古道具屋で手に入れました」

「うん」

「情報収集の意味合いも兼ねてある掲示板を見てたんですよ。そしてたら『気持ち悪いんだよ東方厨は』とか煽る奴が出てきたんすよ

しかもそれを注意したやつに向かって『ゆとり』だの『クズ』だの言ってるですね…」

「あつ」

もしかしてそれって俺のことじゃない…？

「いや、もちろんマナーを守らずにどこにでも東方を持ちだす奴も悪いんですよ

だからつつつて誰にも迷惑をかけていない、ただ東方を好きな人を煽るのはもつと気持ち悪いと思うんですよ

こういう荒らしは反応しちゃいけないのはわかってるんですけど、個人的に許せなかったので

東方の世界観はバカにできないことを交えつつ注意したんすよ」

「そ、それで…？」

「そしたら『お前も気持ち悪い東方厨だ』だの『世界観（笑）』だの『同人でばる儲け』だのそれはもうひどい暴言を言ってきたんっすよね

もうここまで来ると呆れてこういう可哀想な人間もいるんだなあと思うようにしたわけですよ」

「…」

「そしたらさらに煽ってきてですね…。ＩＰアドレスが違うけどどうせ携帯電話か何かから書き込んだんでしょうね。丸分かりなのにアホですよねホント」

「あ、ああ…」

これで確定したな。あの時俺が煽ったのは今日の前にいるこの青年か。問題は どうしてそこから俺がこんな世界に来てしまったかということだが…

「それで思わず頭に血が上って『覚えてろよ』って書きちゃったんですよね。荒らしに反応しちゃいけないのは分かってるのに」

「そ、それから…？」

ここが一番重要だ…

「え？これで終わりっすよ？それでインターネットを切りました」

へ？じゃああの変なURLは誰の仕業なんだ？

「い、いやそんなはずはない！」

「…どうしてそうだと思うんですか？」

「…」

マズイ。青年は俺を疑うような目で見ている

「いや…そ、それは「謙也ー！」え！？」

急に風呂の扉が開いた。そこには…少女がいた

「あれ？謙也と…もう一人は誰だい？」

「諏訪子様ー！今お客さんが来ているので…遅かった」

黄色い髪をした少女が体にタオルを巻いてつつ立っていた。その後ろに早苗さんが恥ずかしそうに俺と青年から目を反らせながら黄色髪の少女を止めようとしていた

「おい諏訪子！普段からやめろと言ってるのにこんな時に限って…。おじさん、すいませんね…」

「あーうー、まさかお客さんがいるとは思わなかったんだよー」

何この子可愛い…おっとつと危ない危ない…

風呂から出て着替え終わった後、これからのことについて話しあうことになった

「さあ、まずはどうしてここに来たのか覚えているかい？」

聞いてくるのは格好こそおかしいけれど見た目は俺と同じくらいの年齢の女性。といっても髪の毛の色は青紫色だが

「えっと…さ、早苗さんたちには話したんですけど…パ、パソコン

をやつてたら気づいたらここに…」

相変わらずのコミュ障が発動。なさけねえ…

「ふーん…。この世界のことは早苗たちから聞いたよね？」

「…あ、はい」

「まあ今日は神社に泊まっていきな。明日早苗に博麗神社の方まで送って行かせるから」

「あ、ありがとうございます」

最初はどうかと思っただけですぐ帰れそうだな
しかし…せっかくだから東方厨の世界とやらをよく見てみたい気も
するな

「さあ、今日はもう遅いから寝ましょう。おじさんは謙也くんと同じ部屋に寝てください。布団は今持ってきますから」

「ああ、ありがとう」

まあそれは明日でいいか

布団を敷き、明かりを消し眠りに入る

横の布団には青年が寝ている。隣の部屋では三人の女性（正確には少女と女子高生と成人女性）が寝てることを考えると…おっと、自重しよう

それにしても青年に掲示板で煽ったのは自分だとバレてないだろうか
不安で眠れない。もともと昼夜逆転してるような生活してたのもあるだろうけど

ここは思い切って聞くべきか…いや本人は忘れているかもしれない

から話を振らないほうがいいのか…

いや！ここは思い切って聞こう。そうしよう！

「なあ、さっきの風呂の時の話だけどさ…」

「…」

返事がない。もう寝てしまったんだろうか

「おい、寝てるー？」

「…」

寝てるみたいだ。良かったような悪かったような…

「やめる…」

「！？」

「輝夜…そうやってからかうのは…やめ…」

「…？」

「鈴仙も…永琳さんも…zzz…」

「なんだ寝言か…」

不安の要因がなくなった俺は、隣の部屋がガタガタと騒がしいのも気づかずにそのまま眠りに落ちていった

だいさんわ（後書き）

これでだいたい主人公の人間性・性格がわかるようにしたつもりですがいかがだったでしょうか？

主人公は東方の内容を詳しくは知りません。早苗も『どっかで見たことある』程度にしか知りませんでした。

インターネットでは威張りちらしていますが、現実では話すのはあまり得意ではありません。

（30歳・未婚。おまけに性交渉をしたことは一度もありません）
あと、神奈子は注連縄を背負っておらず、諏訪子も帽子を脱いでいました。

ここでそろそろ前回当然のように早苗と共に登場したイケメン青年、「謙也くん」の解説をしたいと思います。

名前：足立 あだち 謙也 けんや

種族：人間

能力：回線を繋げる程度の能力

備考：過去などは文中に語られている通り、幼い頃から苦勞している。だがその辛い経験からか誰とでも仲良くなれ、

話すのもうまく、割とフランクだが根は優しい好青年。そしてイケメン。

幻想郷の多数の人妖とかかわりがあり、大勢の女性から好かれていますが本人は全く気づいていない典型的なハーレム主人公タイプ。

かなり東方が好きで、今でも能力を使ってインターネットで情報収集しているが、

『幻想郷の住人には絶対にその事を教えない』ことなどを条

件に、八雲紫に特別に許可をもらい幻想郷に移住した。

（実は何度かうつかり口が滑ってしまった事があるが、なんとか誤魔化している）

能力の詳細・戦闘の強さに関してはまた後日、小説内でわかるようにしたいと思います。

ご意見・ご感想・改善点・批判点・などはコメントの方へお気軽に

だいよんわ

「…」

俺がいる。俺の目の前には最近めつきり会わなくなつた親友がいる

「久しぶり！相変わらず元気そうだな」

「ん？どうしたんだ」

「いや、実はさ、今度俺——に出すんだよ」

「——？」

「そうさ。だからお前もてつだつてく——。みんなも誘つてさ」

「ああ、——」

「——」

「そうか、売れ——」

「——」

「ははは——」

「——」

「ん？」

眩しい…目の前は知らない部屋、隣の布団にいるのは…青年
あ、思い出した。昨日から変な世界に来てたんだつた
ところでなにか大事な夢を見てたような…ま、いいか

布団をたたみ、居間へ出ると青紫色の女性…八坂さんがいた。…昨
日とは違い背中になんか背負っている

「お、起きたか。調子はどうだい？」

「あ、はい。大丈夫です…」

正直言うと八坂さんは少し苦手だ
あの小さい黄色い髪の子と早苗さんは、子供だからまだ普通に接し
られる

だが八坂さんはいくら変な格好で変なものを背負っているとはいえ
見た目俺と同じくらいの年齢だ
やはり…緊張する

「あ、あの…さ、早苗さんとその…黄色い髪の子はどうしたんです
か？」

相変わらずうまく喋れない

「…諏訪子なら少し用があって天狗のそこへ行つたよ。早苗は…ち
よつと異変を解決しにね」

「異変…？」

「ここ最近の話だけだね…幻想郷のいたるところで正体不明の霊が、
湧いたり消えたりを繰り返すという現象が起きているんだ」

「れ、霊…！？」

「お前さんも見なかったかい？昨日の夜。早苗と謙也はそれを見に
行つてたんだよ。そしたらたまたまあんたを見つけたってわけだ」
「い、いや…」

確かに普通より明るかったかも…。というよりあの時はそんなこと
に気を回している余裕がなかった

「まあそれは”神霊”って言うんだけどね。神霊っていうのは、人
間の欲とかの想いが霊になったものなんだ」

「はあ…」

「神霊を集めることは、人間の信仰を集めることと同じ…」と早苗は思ったんだろうね。それで早苗は神霊の原因を調査しに行ったのさ」

「信仰」云々の話は昨日早苗さんから聞いた。それにしても本当によくわからん世界だな。信仰を集めるなら普通は金をばらまくか政治家を味方につけるか…

「ふああ…おはよう…あれ？神奈子、早苗と諏訪子は？」

やっと青年が起きてきたみたいだ

「諏訪子なら天狗と宴会、早苗なら異変の解決に行ったよ」

「異変！…！」

眠気まなこだった青年の目が急に輝いた。俺も八坂さんも一瞬ビクツとする

部屋に戻ったと思ったらすぐ出てきた。脇にはノートパソコンを抱えている

「ついに来たか…！ははは、よっしゃ、行ってくる！」

「お、おい謙也！出ていったのは昨日の夜だからもう遅い…行っちゃった」

ものすごい勢いで青年が出ていった。"異変"がなにか大事なことになるだろうか…

「や、八坂さん「神奈子でいいよ」…か、神奈子さん、彼はどうしたんですか？」

「…どうしたって？」

「い、いや…何であんなに血相変えて出ていったのかなー、と」

なんというか青年はものすごい興奮していた。まるで”待ちに待ったゲームの発売日”のような…

「さあ…私にも見当はつかないねえ。ただ謙也は幻想郷に来てからまだ一度も異変を経験したことがないから見てみたいのかもね

前に私がこれまで起きた幻想郷の異変の話をきかせたら目を輝かせていたからね」

「そうですか…」

場所も聞かずに行ってしまったが大丈夫だろうか…まるで”どこで何が起きるか知っているかのような顔をしてた”けど…

ところで昨日早苗さんは俺を博麗神社まで送って行ってくれと言ったけど大丈夫なんだろうか…

「あ、あの早苗さんに今日帰れるって言われたんですけど…」

「ああ…悪い。謙也も急に出てっちゃったしねえ…今日は諦めてくれ」

ええー…

「…あの、やさk…神奈子さんじゃダメですか？」

「私かい？いや、昼間っから神が神社を留守にする訳にはいかななさ。ほら、参拝客もいるだろう？」

外を見てみるとたしかに数人、参拝客がいた

「すまないね…まあ神社の境内なら危険もないだろうし適当に散歩でもしていてくれ」

「はい…」

「ただよく考えると昨日『明日連れて行く』と言ったのは早苗さんだ。神奈子さんも『早苗に行かせる』と言っていた
…
ただ早苗さんは昨日の夜に行ってしまった…」

靴を履き外に出る。昨日は夜だったから良くわからなかった神社の細部まで見える。なかなか豪華な造りをしている
ふと周りの参拝者たちからの視線に気づく。俺は神社から出てきたからもしかしたら神社の関係者とか思われてるかもしれない
いや、いきなり知らない男が出てくるのだから変に思われてるかも
…考えてると落ち着かなくなってくるのでそそくさとその場を離れた

「湖だ…」

神社の裏手に回ると、湖があった。辺りには誰もいない
俺は記念にスマホで写真を何枚か撮った…

結局適当に散歩してちょうど昼飯くらいの時間になり、神社に戻ってきた

「おーい、暇だったら料理作るの手伝ってくれ」

「あ、はい」

台所に行くと神奈子さんと…誰だろう女の人（女の子？）が二人

「あれ？神奈子さん、この方は？」

「もしかして神奈子の彼氏？」

「ハハ、違う違う。この人は昨日来た外来人だ」

「へー、私は秋稔子。よろしくね」

「私は秋静葉」

「ど、どうも…」

男一人に女性三人…緊張がヤバい。少し挙動不審になっている俺を秋姉妹は不思議そうな顔で見てる

「よし、じゃあ私はダシの準備をするから、三人は野菜を切ってくれ」

「はい！」

「了解！」

「は、はい…」

料理は苦手ではないけど…駄目だ、緊張して手が震える

駄目だ…集中集中

「ねえ、おじさん」

「…うわっ！」

いきなり話しかけられてとっさに視線をそちら側に向けてしまった。その瞬間包丁の位置がずれて俺の指に…

まな板は血まみれになった

「ぎゃああー!!」

「わわわ大丈夫ですか!？」

「…何やってんだい」

どうしよう…変な目で見られてる…落ち着け…落ち着け…

「早く血を止めなよ!! 全く!」
「あ…」

神奈子さんがとっさにフキンを俺の指に巻いてくれた

「お前さんは待ってな。その指じゃ料理もできないだろうし」
「…はい…すいませんでした…」

部屋に引き上げる俺。最悪だ…逃げ出したい…

だいよんわ（後書き）

「だいよんわ」終了です。ご拝読ありがとうございました。

新作、『東方神霊廟』要素が少し入っていますが、作者自身もまだよく知らないこともあるので、

神霊廟新キャラは出すとしても体験版までに出てきたキャラまでにします。

故に、神霊廟のストーリーや設定は知らなくても読めるようにしていきます。

だいごわ

微妙な空気の中、昼食が出来上がった

味噌汁に稗と粟が混ざったご飯と少しの塩に漬物と修行僧のような質素なものだった

まあ朝もだいたいこんな感じだったし、もともと食は細いほうなので大丈夫だが

「じゃあ、いただきますーす」

「いただきますー！」

「い、いただきます」

味噌汁を一口飲む。うまい。高級旅館で出てくるような味噌汁の味だが、その味も指の痛ささえもこの場の空気と”初めて会った女性三人の中に男一人”という状況の緊張でかき消される
普通、緊張しないほうがおかしい(と思う)。だが何故あの青年はあんなにも気楽に振る舞えるのだろうか

「そつだ、おじさん。何か外の世界の話聞かせてください」
「えっ」

秋静葉さんが言った。そつちにとっては気楽なものだけでもこつちにはものすごいプレッシャーだ

秋稔子さんも神奈子さんも催促してくる

ここで昔のトラウマが蘇った。大学の時、コンパに誘われたのだ
もともと俺はどちらかというとオタクなグループの人間だった。親友もオタクな奴だった

そんな俺がリア充グループのやつからコンパに誘われたのだ。誘っ

てきた奴は中学から同じだった。軽く話す程度で深い付き合いはなかった。行かなければいいものを俺は行ってしまったのだ

結果はもちろん最悪だった。少ないおしゃれの知識を振り絞り出る限りのおしゃれをした
だがコンパでは散々ネタにされ、俺をいじって話を盛り上げるネタに使われた

「おい、どうしたんだ？」

「…！」

急に考えこんでしまったので3人に不審に思われてしまったらしい

「い、いや…なんでもないですよ」

「それでそれで、外の世界の話をしてくれよ！」

稔子さんがノリノリで聞いてくる

「え…えつとまあ、普通でしたよ」

自分でも何を言っているか、何が言いたいのかわからない

「外の世界の”普通”と幻想郷の”普通”は違うんですよ。例えば風景とかはどうでしたか？」

私が最後に外の世界にいたのは幻想郷が隔離される前だったから…100年くらい前かな」

”幻想郷の隔離”云々は昨日聞いたので、もはや驚かなくなっていました。それより返答しなくては

「100年前とは違うかもしれないですね…はは」

その後、すこしずつ話すのに慣れてきて、神奈子さんやこの守谷神社が数年前まで外の世界にいたという話や

その時自分が原因で異変になった事など他愛も無い話をしていた

「あ、そうだ。二人とも、もしよかったらこの人を博麗神社まで送ってやってくれないか？」

「「「え？」「」」

俺と秋姉妹二人がハモってしまった。”博麗神社に送る”ということとはすなわち元いた世界に帰れるということだろう

「ホントは早苗に送らせるつもりだったんだけど、急に異変を解決しに行っちゃったからな

諏訪子も天狗と宴会だし私も神社を留守にする訳にはいかないし、もしよかったら頼む」

「構いませんけど…帰っちゃうんですか？」

「もう少し外の世界の話を聞いてみたいのに！」

改めて考えると”帰る”ということは”もうこの世界には来れない”ということだ

話が盛り上がっていて忘れてたが青年はこの世界はあの『東方』の世界と言っていた

途中で思い出したが『博麗神社』と初めて聞いたときどこかで聞いたことあると思っていた

よくよく思い出すと東方の超大規模な同人イベント『博麗神社例大祭』だ。偶然の一致なわけがない

おまけに、これまで会った人物が青年と神社の外にいた参拝客以外

全員女性だ。確か東方は女ばつかというのを覚えている

髪の毛の色もそうだ。緑、青紫、黄色…どれも普通ではない
ブサイクがいないのもそうだ。ブサイクどころか全員”可愛い”部
類に入る。全員目が大きく顔が丸い。二次元キャラをそのまま三次
元にした感じだ

「いや、外の世界の住人で、ましてや特殊な能力もない。さらに外
の世界の常識を持った人間を幻想郷に置いておく訳にはいかないの
さ」

「神奈子たちも外の世界から来たじゃん！」

「それなら謙也くんはどうなるんですか？」

だが何度も思っている通り、綺麗な空気と綺麗な風景。早苗さんか
ら聞いた”幻想郷”のこと

東方がこんなに綺麗なはずない。東方がこんなに深いわけない

「私はもともと”神”だからな。早苗も”現人神”で普通の人間じ
やない。それでも早苗を幻想郷に来させるかはかなり迷ったよ

謙也は…そうだね。”特別”だからかな」

「“特別”…？」

「そう。謙也は外の世界の住人だがあつという間に幻想郷に対応し
ていった。まるで幻想郷を最初から知っていたかのようにな」

俺のイメージの”東方厨の世界”はまるでトレスしたかの様な同じ
顔のロリロリなキャラ達が気持ち悪い東方厨に奉仕していて
東方厨がブヒブヒ言っていてそこら中に色々な汁がこぼれている汚
い世界が…

「おじさん、おじさんはやっぱり帰りたいですか？」

「へ？」

ヤバい。また一人で考えていてしまっていた。

「え、えっと…何ですか？」

「話を聞いてなかったんですか！だから…おじさんは外の世界に帰りたいと思っているかどうかってことです！」

「…」

どうだろう。正直自分でもわからない。東方は大嫌いだし帰りたくないと言ったら嘘になる。けどもう少しこの世界を見てみたい気がする

「俺は…もう少しこの世界を見てみたい…気もする」

「…！」

静葉さんと穰子さんは驚いたような嬉しいようなよくわからない表情をしている

「そうかい。だが宿はどうするつもりだい？少しだけならいいけどさすがにずっとはこっちも泊めさせてあげられないぞ」

「うっ…」

そうだ。いつまでも神奈子さんたちにお世話になるわけにもいかな…ん？

「あれ、謙也くんは…どうなんですか？」

「えっ！…け、謙也は特別さ。そ、それに男二人も養っていくことはできないからね」

どうしたんだ？急に神奈子さんの頬が赤くなって慌てだした

「神奈子はねー、謙也に惚れてるのさ！」

「ち、違う！」

「またまたー神奈子はウブだねー」

「お、おい！」

なんだろう…何故かイライラする

「あの…一度人里の方に行ってみてから決めるといっのはどうですか？働き手もあるかもしれないですし…」

「お、静葉良い事言っね。おじさん、そうしようよ！」

「え？」

確かにこのまま帰るのはあまりにも惜しすぎる。とりあえず行ってみるのもいいかもしれない

「あ、ああ、そうするよ」

「よし！じゃあ行こう！空は飛べ…ないよね。うん、しょうがない歩いていこう」

空…？飛ぶ…？まあどうせ空でも飛べるのだろう。もう驚かないさ

―

「神奈子さん、お世話になりました」

「いやいや、構わないさ。それにもう会わないと決まったわけじゃないからね」

「はい、では」

「ああ」

俺は神奈子さんと別れ、神社を後にした

だいごわ（後書き）

中だるみ感が否めない……。まあ次話から主人公が人里へ行きます

だいろくわ

「はぁ…はぁ…」

「もうすぐですよ」

「男なのに情けいなあ、全く」

無茶言うな。いくら東京の人混みや満員電車の経験があるとはいえ現代人がこんな距離を簡単に歩けるわけない
山を下ること約2時間、今度は平らな道ながらも石や岩がゴロゴロ転がっていて歩きづらい道を1時間

「見えてきましたよー」

「お、本当ですか！」

思わず喜んでしまった。パソコン漬けの生活ながらも何故か視力は良いので里の方を注視してみる

…想像していた通りだ。藁葺き屋根の建築物が並んでいる
入口の門を潜り、中に入る。教科書に書いてあるような江戸時代の街並みだった

「おじさん、どうですか？人里は」

「…なんというか、和みますね。古き良き日本というか…」

「へえ、外はこんな感じじゃないのかい？」

「外…？」

「外の世界だよ。ほら、おじさんがいた世界」

すっかり忘れてた。俺は元いた世界に帰るか幻想郷に残るか選べないといけないんだ

そしてさらに忘れてたがこの世界はあの東方の世界…だったはず

「それで…どこに行ったらいいんでしょうか？」

とりあえずひと通り案内して貰う予定だ

「そうだね、まずは…「お、秋姉妹とおじさんじゃないっすか。偶然ですね、ははは」…謙也くん！」

振り返ると、朝、もの凄い勢いで出ていった青年が脇にノートPCを挟んでカラツとした笑顔でつつ立っていた

「秋姉妹もこんなところでどうしたんだ？しかもおじさんと一緒に」
「実はですね…」

ここで静葉さんがどうして俺を人里に連れてきたのか説明してた。
別に説明しなくてもいいのに…

「なるほどね…」

「謙也くんはどうしてここに？」

稔子さんが青年に聞く。にしても、今朝あんなに急いで出てったくせにみようにのんびりしているというか落ち着いているというか

「ああ、僕は…話せば長くなるから、歩きながら話しましょう」

「おじさんなら分かると思いますけど、朝急いで守矢神社を出て命蓮寺に向かったんですよ

でも、着いたときには異変は終わってたみたいで…」

”どうして場所がわかったのか”という大事な部分が抜け落ちている気がするがまあ突っ込むのはやめておこう

「それでしぶしぶ帰ろうと思ったんですけど、カメラを持って嬉しそうにしてる射命丸のやつを見つけてましてね」

「射命丸…？」

「あ、おじさんは知らないんですけど。 ” 文々。新聞 ” とかいう酷い新聞を作ってる天狗なんですよ

初めて幻想郷に来て守矢神社に泊まったときは ” 早苗の愛人 ” だの、色々あって二週間くらい紅魔館で執事として働いていた時は ” 今度はレミリアの愛人 ” だの、地底でさとりさんとかに行ってた時も…」

…この青年は、一度喋りだすと止まらないんだよな。もうだいぶ性格が掴めた

「そこで、僕は思ったんですよ。 命蓮寺の方から飛んできて、しかも嬉しそうな顔をしているということとは

射命丸のやつはきつと今回の異変の写真を撮ってきた、と！」

どうしてそんなにはしゃいでいるのか俺には見当がつかない

「それで、射命丸さんから写真をもらってきたんですか？」

「あいつがそう簡単に自分の取った写真をやるかなあ…」

” 射命丸さん ” がわからない俺にとっては理解しづらい。どこかで聞いたことのある響きだが

「そう思うだろ？ 最初頼んだ時はもちろんダメだったよ。だけど何

回も頼んだら特別にコピーを貰えたのさ」

「へー、それは凄いですね」

「わざわざそんなことしなくたってちょっと待ってりゃ頼んでもいないのに”号外”と称して送りつけてくるだろうに…」

「いやー、”異変”が起きると聞いたらつい居ても立ってもいられなくってさー、ははは」

何が凄いのか全然わからん…ものすごい疎外感を感じる…

「ん？」

急にスマホが鳴った。忘れてた、青年の近くにいると電話が通じるんだっとな…

相手は…知らない番号だ。出るべきかどうか迷ったが、もしかしたら前にダメ元で企業に送った書類選考が通ったかもしれないので一応出て見ることにした

「はい、もしもし」

「ん？おじさん、何で箱に向かって喋ってるんだ？」

「おじさんどうしたんですかー？」

「おいおい稔子、静葉、静かに静かに！これは携帯電話つつて遠くにいる相手と話せる機械で…」

秋姉妹が携帯電話を知らないようで俺に話しかけてきたのを青年が止めて説明してくれている。ありがたい

『おい！昨日から何度も電話しているのに電話に出ないとはどういう事だ！！』

「うおっ！」

この声は…親父だ。親父含む家族とは俺が会社を辞めた時に大喧嘩してから一度も連絡を取っていなかった
だが、実家からの送金は大学時代からだらと続いており、それだけが唯一の家族との繋がりであり、大事な収入源だった

「…そんなことは今はいい。今すぐ家に戻って来い。今すぐにだ。」
「お、おい、どうしたんだよ急に。」

親父の声が焦っているのが分かる。何かあったんだだろうか

「母さんが…病院に運ばれた。」
「えっ!?!」

つい大声を出してしまったから青年と秋姉妹がびっくりしている。
周りの歩いている人達も俺の方を見て不思議そうにこっちを見ている

「お前は知らないだろうけどな…母さんはずっとお前の奨学金の返済と生活費の送金するために朝から晩までパートに行ってたんだぞ。60近い体でな、いつかお前が自分の給料で家に仕送りを入れるのをずっと待ってたんだぞ!!」

「…え、それって…どういう…」

「父さんがお前と大喧嘩して、父さんが”もうお前に金を送らないし奨学金も払わない”と言ったのを覚えてるか？」

それで母さんが”お前が可哀想だから”といってパートを始めたんだ。お前は何も気づいていないみたいだけどな!!」

俺の通っていた大学はそれなりに有名な私立大学だった。勉強を始めた時期が遅く、当時は受験勉強に必死で
カネのことまで頭が回らなかったし、親もカネのことは心配しなくていいといってくれていた

その後大学を卒業し、それなりに大きい企業に就職したものの人間関係でうまくいかず、すぐやめてしまった

その事で実家とは完全に疎遠になり、適当に就活しつつもたらだと30まで過ごしてきた

「仕事だけじゃねえ！！いつかお前が嫁さんを連れてきて、初孫をこの手で抱きたいと…。それがお前30もなつて連絡の一つもない…母さんはなあ！お前が父親になるのをずっと待ってたんだぞ！！」

「…」
「思えば会社を辞めてから何かしただろうか。何もしてないや、した。確実に何かがあったはずだ。確か親友と…親友の…」

「おい！聞いているのか！！」

「…聞いているよ。それで？何が原因で病院に運ばれたの？」

「パニックすぎて逆に冷静になる…というのが今の状況だろうか。青年と秋姉妹にはこの会話は聞こえていないはずだろうか」

「…父さんが会社から帰ってきたらな、台所でうつぶせの状態で見つかったんだ。医者によると脳卒中らしい。」

「ふーん…でもそれって母さんがパートしてるから倒れたとは限らないよね。歳も歳だし」

「…減らず口を！！」

「何で親父が俺に金を払わなかったのさ？つまんない意地を通して結局母さんが無理に働くのを止めなかったんだろ？親父は。」

「うるせええええ！！！！」

「うるさいのはどっちだよ全く…。そんなの俺が気付くわけ無いだろうが」

『…ともかく、早く帰ってこい。』

電話が切れた。何様だあのクソ親父が。あの…クソ親父…くそ…おや…

「おじさん電話終わ…え！？おじさん、ど、どうしたんすか！？」

「「え…？…え…？」」

わからない。急に目から涙が溢れてきた。自分でもわからない。何でだ…？

小さな水の粒が頬をつたい顎をつたい、舗装されていない地面に落ちた

だいろくわ（後書き）

ようやく折り返し地点です。内容的にもうすぐ終わりそうな気がします。がもうちょい続きます。

今回は（これまでもそうですが）後半リアルな展開になりました。少し急展開すぎることも否めません…力不足です。

あと完全に余談ですが、謙也くんが射命丸に写真を欲しいと頼んだ時は、頼むと言うよりむしろ脅しに近かったです。

謙也くんは、自分が外の世界にいたときに得た射命丸についての知識（東方文花帖など）を適当に言っただけでしたが

射命丸は『何で自分のことをそんなに知っているんだ』となって怖くなったのと、

『自分のことを知ってくれている』と嬉しく感じたのもあり、現像した写真のコピーを謙也くんに上げました。

（射命丸が謙也くんに惚れている理由については以前も説明しましたが）そういうものだ”と認識してください。

謙也くんはよくある”東方二次創作のハーレムもの”、もしくはギャルゲの主人公だと思ってください。

わからない方はこればかりはすいませんとしか言わざるを得ないです。）

多数要請があつたら、謙也くんと射命丸のやり取りも書きます。

では、ご意見・ご感想、お気軽にどうぞ。読んでくださった方のコメントが励みになります。

だいななわ

『…ともかく、早く帰ってこい。』

電話が切れた。何様だあのクソ親父が。あの…クソ親父…

「おじさん電話終わ…！？ど、どうしたんすか！？」

「え…？…え…？」

わからない。急に目から涙が溢れてきた。なんでだろうか。

「稔子さん、静葉さん、謙也くん。悪いけど俺、外の世界に帰るよ」
「えっ！」

何でこんな言葉が出たんだろうか。母さんが倒れたからだろうか
冷静に考えてみても、東方の世界なんかより母さんの具合のほうが
大事だ。俺は大学を卒業してから今まで何をやっていたんだろうか

「そんな…」

「…おじさん、何があったのか詳しく話してくださいよ」

「ああ…。俺の母親が倒れて病院に運ばれた」

「！…！」

言うつもりはなかったのに言ってしまった

「よし…急いで博麗神社に行きましょう！おじさんは飛べ…ないです
すよね。急いでいるので失礼しますよ」

急に青年に腕を掴まれた、と思ったら急に体が浮かび上がった。
…え？

「お、おい！何だよこれは！！」

「空を飛ぶんですよ。そのほうが速いっすからね！少し我慢してください！！」

「うわあああああ！！」

↓

超高速で進んでいく。下にはひたすら森が広がっている

それにしてもジェットコースターにでも乗っているような気分だ…。高所恐怖症じゃない俺でも怖い

「な、なあ謙也くん！君は普通の人間じゃなかったのか？」

「ちよつと色々あつて、特訓したら飛べるようになりました。もともと素質があつたとも言われましたけどね！」

風の音で聞こえづらい…。ん？後ろから誰か飛んでくる

「よお、謙也！…あれ？それは誰なんだぜ？」

見るからに”魔女”っぽい格好をした少女が飛んできた。まあどうせまた本物の魔女なんだろうな…。そしてまたどこかで見たことが…

「悪いな魔理沙。今はちよつと急いでてお前の相手はできない」

まりさ…魔理沙！？この名前はわかる。確かニコ動のあの変な歌のやつだ

「ちえっ、つれないぜ。じゃあな！」

そう言う魔理沙はどこかに行った。そうだ、”魔理沙”だ。あの

電波ソングの

人里に行った時に、東方の世界であることを少し疑っていたが、やっぱり東方の世界は確定らしい

「おじさん、そろそろ着きますよ」

「あ、ああ」

――

”博麗神社”に着いた。守矢神社より一回り小さいがそれなりの大
きさで、また違った雰囲気醸し出している

「霊夢――！居るか！霊夢！」

”霊夢”というのも聞いたことがある。顔を見ればわかるんだろう
な……

「……あら、謙也さん。何か用？」

赤い大きなリボン、露出させた腋、巫女なのになぜかスカート。そ
うだ、これが確か主人公の”博麗霊夢”だ

「ちよつと色々あつてな。このおじさんを外の世界に帰してやつて
くれ！」

「……え？」

霊夢はきょとんとしている。当たり前だ。青年の説明が足りなさず
きる

だからといってコミュ障の俺がうまく説明できるはずもない

「頼む！霊夢！」

「…詳しく説明してちょうだい」

全くごもつともです

「このおじさんは外来人なんだ。それで―」

青年が断片的に霊夢に説明してくれた

「…要するにこのおじさんを外の世界に帰せばいいわけね？」

「ああ。そういうことだ！」

「わかったわ。全く…せつかく異変が解決してゴロゴロしてたのに今日は時間がないわね」

「お前は普段は時間が有り余ってるじゃねーか」

「…面倒だからさっさとやるわよ。こっちに来て」

霊夢に言われるまま、鳥居の前まで来た

言い忘れていたが、この博麗神社、鳥居が反対側に設置されている。それともただ俺たちが反対側から入ってきただけなのか…

「この鳥居から先の領域は幻想郷と外の世界の境界よ。ここからひたすらまっすぐ突き進めば外の世界に出るわ。ちよつと待って。今結界を解くから」

「あ、はい…」

思えば、ネットをしていたらいきなり東方の世界に来てしまった。だが、特に何事も無く帰ることになった

振り返ってみれば長かったようで短かった。そして出会った人物がだいたい異性だった。まあ東方の世界なんだから当たり前なんだろうけど

もう来れなくなることに悔いは無い。無職ながらもそれなりに金はあったので外の世界もまあ楽しいしなにより楽だ

この世界は本当に綺麗で幻想的だが、常に人と接していなければいけないしなにより色々不便でめんどくさい。ネットも自由にできない青年のように”東方”が好きな人ならここに留まるという選択肢もあるんだろうが、あいにく俺は東方は嫌いだ。…嫌いだ

「1つだけ気をつけなさい。境界の中では色々な概念、特に”時間”の概念が曖昧になるから、過去の出来事が急に頭に思い浮かんでくることもあるわ

だけどそれは一時的なものだから考えちゃだめよ。ひたすら突き進むの。…わかった？」

「あ、はい」

「…準備が出来たわ。行きなさい」

「…はい」

俺は青年の方を向く

「今まで、色々ありがとう。神奈子さんたちにもお礼を言っておいてくれ」

「何言ってるんすか。こっちがお礼をしたいくらいですよ！またいつか機会があったら一緒に酒でも飲みましょう！」

「ああ。未成年の飲酒はなるべく控えろよ」

「ははは、考えておきます」

青年とは、いつかもう一度会ってみたい気もする。考え方も年齢も性格も境遇も何もかも違うのに

「さあ、行きなさい」

「…はい！」

俺は鳥居を潜り、走りだした

走る。ひたすら走る。周りは普通の森だ

『おい、——行こうぜー』

！…これが言っていた現象か！

頭の中に直接声が響く。この声は…親友の声だ

『悪いな、俺は誰かさんと違って頭が——いから勉強しないといけないんだよ』

これは…俺の声だ！

『えー、——のぶんの——も買ってきちまつたぜ』

『く、お前は勉強しなくても——なのかよ…』

ところどころ聞こえない。俺と親友が話しているという事だけは理解できる

『ちえっ、つまんな——。まあ気が変わったら——くれよ。——だけあげるからさ』

『ああ…』

そうだ。おそらく確かこの時初めて”東方”というものを知ったんだ

『あ、どうもこんにちは——の——と申します』

！……この声は…！

『あ、どうもこちらこそ。——の——です
すか？』

声の主に俺が応対している

『あ、はい。——さんは？』

『僕は3回目なんですよね。——んですか？』

『それは…あいつに聞いて——いとわからないですね』

『そうで……。まあ、お互い頑張りま——う』

『ええ、では』

そつだ…この時は…まだ…

『なあ、——。もうやめようぜ』

また声の主が親友に戻った

『俺も、そろそろ就職しないといけない時期になってきたんだ。フリーターになるわけにもいかないしな

大学を出たら俺たちはもう別々の人生を歩むことになるんだ。今までゴメンな。これまで手伝ってくれてありがとうな』

『——、——！——』

親友の声がはつきりと聞こえる。しかし対照的に自分の声は全く聞こえなくなった

『ああ。別に永遠に会えなくなるわけじゃないんだからさ。また今

度あつたら酒でも飲もうぜ』

『――。――！』

「…あれ？」

「あつ」

「…」

気がつくと目の前にはそれなりに大きな神社があつた。そしてその縁側には若い男女が二人…。一人は腋を出した巫女でもう一人はイケメンな青年…

つて、戻つてきてしまったじゃないか！謙也くんと霊夢は二人で縁側に座つてお茶を飲んでいた

「あら、さっきぶりね」

「また会えて嬉しいようななんというか複雑な気分っすね…はは」

「…や、やあ」

とりあえず挨拶をしておいた…

だいななわ（後書き）

前に『神霊廟新キャラは出すとしたら体験版までのキャラ』と言いました。が、やっぱり出さないことにします。

神霊廟どころか、地霊殿・星蓮船キャラは名前すら出てきて無いです。ね…紅魔館・妖々夢・永夜抄キャラもいまのところ名前だけですし…。

今更ですがかなり独自設定が含まれています。ホント今更ですが。

あと、これから少しずつ主人公の過去が明らかになってきます。

勘の良い方はすぐわかってしまうと思いますが、わかってもらっても予想などを書かないでいただけると嬉しいですよ…。

もちろん、小説に対する意見や感想、改善点などはぜひぜひお待ちしております。

だいはちわ

「あら、さっきぶりね」

「また会えて嬉しいようななんというか複雑な気分っすね…はは」
「…や、やあ」

とりあえず挨拶をしておいた。ほんの数分前に会ったばかりだが

「忘れてたの？頭の中に浮かんでくる過去の出来事は考えちゃダメよ。もしかして何か頭の中で考えてしまったんじゃないでしょうね？」

「…あっ」

すっかり忘れていた

「…もう一度行って来なさい」

「はい…」

もう一度鳥居を潜り、突っ走る

—

『あんまり売れ——』

『あ、これ僕のサ——の——です』

気にするな…！気にするな…！

『——で——てけるやつなんてほんの一握りなのはわかってるさ』

『ははは……—会社の内定取れなかった……』

どっどん声が大きくなる！考えるな考えるな！！

……急に世界が変わる。眩しい……

ここは……書店？近くのデパートの大きな書店だ。何回か来たことがある

周りの人たちはそれぞれ自分の目当ての本を手にとっている。俺のことは誰も気にかけていない

ふと、目の前の本棚をしてみる。そこには大きな字で”東方Projectコーナー”と書いてあった

おそらくそのキャラクターであろうコウモリのような羽の生えた少女やナイフを持ったメイドの絵が飾ってある

置いてあるのは、小説……漫画……資料集……一見どれがどれだか判断がつかない

側に書かれてある”店長のオススメ”と題された紹介文に目をやる

『東方Projectは”同人ゲーム”から大ヒットして話題沸騰中の注目作です！あなたも幻想郷の世界観に魅了されてみては……！』

「うわあああああああ……！！！」

何が起こったんだ？とてつもなく嫌なものを見た気がする……。そして

「ここは…」

「…また戻ってきたの？」

「お、おかえりっす。おじさん」

博麗神社だった。後ろには鳥居。結局また戻ってきてしまった
おかしいな…なるべく考えないようにしたはずだが

「あのー…もう一度いいですか？」

「…おそらくもう無理ね。諦めなさい」

「えっ」

「普通は一回で戻れるはずよ。結界の調子が悪いのかあなた自身に
何か問題があるのか、はたまたそのどれでも無いか

二回もやって帰れないなんてことはありえないわ」

「…」

「どうしようか…これでは帰れない…。ん？」帰れない」？

「どうして俺は帰ろうとしているんだったか。あ、そうだ、母さんが
倒れたからだ

よく考えれば俺が急いで変える必要はない。帰ったところで良くな
るという話でもない

第一、母さんや父さんとはもうここ何年も合っていない。俺の中で
の両親像も数年前で止まったままだ

人里で父さんから電話を受けたときは何故か泣いてしまったが、冷
静に考えると実に”どうでもいい”事だった

「それじゃあおじさんが困るんだよ！霊夢、何とかならないか？」

「あのさ、謙也くん。…俺はやっぱそんなに急いで帰る必要はない
と思うよ」

「…え？」

青年のほうが必死になっている。何でだろうか

「どうしてっすか！！母親が倒れたのに何でそんな冷静でいられるんですか！！」

「ど、どうしてっ。ほら、帰れないんだし諦めるしか…」

「『諦める』ってなんですか！！ええ、確かに僕は”母親”という存在がないので少しズレているかもしれませんが

ただど自分を産んでくれたたった一人の存在なんじゃないですか！！どうしてそんなことが言えるんですか！！」

「ちよ、ちよっと、落ち着けよ…」

そうだった、この青年は孤児だった。”母親”という存在に憧れているんだろうか。何か神格化しているようにも見える
なにかのドラマのセリフみたいにも聞こえる

「謙也さん、私も”母親”がいないからその気持ちはわからなくもないわ。でも、二人がここで揉めても帰れないという事実は変わらない、そうでしょう？」

「霊夢…そうだよな。おじさん、なんかすいません」

「あ、ああ…」

何なんだろうかこの展開は。何か違和感が…

「気づかない間に日も暮れてきたわね…」

「霊夢！邪魔するぜ！」

「うわっ！」

急に何かが物凄い勢いで飛んできた。誰かと思ったら神社に来る時

に会った魔女っぽい少女、『魔理沙』だ

「お、謙也もいるじゃないか。さっきはあんなに急いで愛しの霊夢に会いに来たのか？」

「そんなわけあるかつ！それで、魔理沙はどうしてここに？」

「いや、ちよつと霊夢に伝えることがあつてな。霊夢、命蓮寺で今日の異変のやつらとの宴会に誘われてるぜ。これからのことも話し合うらしい」

話に入れない…

「めんどくさいわね…」

「なあなあ、魔理沙。僕も行っていいか！」

「…すまないな。今日参加できるのは、今回の異変の関係者だけなんだ」

「…そうか」

青年のテンションが急に上がったと思つたら今度はがくつと下がった

「じゃあ面倒だけど行ってくるわ。謙也さん、留守番お願いするわ」

「えっ！だつておじさんも居るんだぞ？」

「二人で留守番してればいいじゃない。それじゃあ」

「という事で、じゃあな！謙也とその連れのおじさん！」

「え、お、おい！霊夢！魔理沙！」

霊夢と魔理沙は早々と飛びさつていった。まさか男二人だけ取り残されるとは…

「はあ…しょうがないっすね。腹いせになんか置いてある食べ物食べちゃいましょうよ。ちよつと晩飯くらいの時間ですし」

「あ、ああ…」

その時、スマホが鳴った。メールが来ていた。おそらく青年に近づいたからメールが繋がったのだろう

差出人は…父さんだ。タイトルには”早く帰ってこい”と書いてあった。本文も確認する

『今どこにいるんだ？母さんの具合に変化はない。頼むから早く帰ってこい』と書いてあった

↓

さつきは何故涙が出たのかわからないが、今はこの文面を見ても”どうでもいい”という感情しか生まれなかった

いや、何も感じなかった。何故なら、今俺は外に帰れるかどうかもわからないし、”外”と言われても現実感が無いからだ

「おじさん、どうしたんすか？」

「い、いや、なんでもない」

俺はスマホを消し、ポケットにしまった

だいはちわ（後書き）

霊夢の性格がなんか違うのは…（謙也くんの）主人公補正の影響です。

神霊廟の異変の後に宴会をやるのも、独自設定です…。

だいきゅうわ（前書き）

累計PVが一万に達成しました

（主人公による）”東方”に対する侮辱的な表現など、合う合わないが激しい小説だというのは充分理解して書いているつもりです
読んでくださっている方には本当に心の底から感謝申し上げます
あと2、3話ほどですが是非最期までお付き合いください

だいきゅわ

東方の世界に居るにもかかわらず、何故か虚しく男二人で飯を食べ
ている

まあ昼のように女ばかりの中、男一人というのもそれはそれで嫌だが
すでに、日は沈んでおり、ランプの明かりだけなのでものすごく暗い

「なあ、謙也くん。れ、霊夢はこの神社に一人で住んでるのか？」
「ん？そつですよ。それがどうかしたんすか？」

仮にも女の子一人で住んでいる家を、男だけにさせるとは…

「いや…神社といえどよく自分の住居を男だけにさせれるなー、と」
「ははは、僕は何度も留守番任されたことあるからもう慣れちゃい
ましたよ。正直初めは少しそういうことを意識した気もしましたけど
もうすっかり気にしなくなりました」

「なるほど…」

「とりあえず、これからのことを話しましょう。今日はどうせ霊夢
のやつは帰ってこないでしょうから、泊まらせてもらいましょう」

泊まるのか…まあ流れるにそうなるとは思った

「問題はどうかやっておじさんが外に帰るかですよ。とりあえず明
日になって霊夢が帰ってくるのを待つしかないですね

でもあいつのことだからなるべくろくに酔って帰ってくるんだろ
うし」

「そのことなだけでさ…」

別にそんなに急いで帰る必要はないんだけどな…

「あー!!」

「うわっ!!」

急に青年が大きな声を出したのでこっちまでびっくりしてしまった

「1つだけ方法があったんすよ!!紫ですよ紫!」

「ゆ、紫?」

ちよくちよく『紫』という名前を聞くが何のことだか分からない。
恐らく東方のキャラクターなんだろうけど

「あ、でも紫が協力してくれるかなあ…まあとりあえず電話して…」

「あのさ、紫って誰?」

「え?...あー説明していませんでしたっけ」

「うん」

青年から、詳しい説明を受けた。『境界を操る程度の能力』とかいうチート能力を持っており

実質、幻想郷の支配者で、幻想郷と外の世界を自由に行き来できるらしい

気まぐれで外の世界から幻想郷に人を連れ込むこともあり、二つ名を『神隠しの主犯』と言う…

どうしてそんな大事なことをもっと早く教えてもらわなかったんだろつか…もしかしたらそいつが犯人かもしれないじゃないか。怪しすぎる

「神出鬼没で普通は会えないんですけど、俺は能力のお陰でいつもこの電話で連絡取れますからね!

あいにくケータイが古くてネットができないのでノートPCも持ち歩いてるんですけどね、はは」

「…なあ、前から聞こうと思ってたんだけどそれって電源はどうなってるんだ？」

ずっと気になっていた質問を試みる。守矢神社でもコンセントやバッテリーらしきものはなかった

「それが実は電池がなくても大丈夫なんですよ。もともと能力というものの自体も非科学的ですからね」

「そんなばかな…」

「ははは、『幻想郷では常識に囚われてはいけない』ってよく早苗に言われましたね、はははは…」

…っと、話題がそれましたね。紫に電話しないと」

そう言っただけで青年はケータイを取り出し、電話をかけた

「…」

「…」

「…」

「…もしもし！」

『おかけになった電話は電源が切られているか…』ピッ

どうやらあつちの電話が留守になってるみたいだ

「も、もう一度かけます」

「あ、ああ」

「…」

「…」

「…」

『おかけになった…』ピッ

「繋がらないみたいです。いくらこっちから通じてもあっちが
出なければ無理ですもんね、はは…」

そういつて青年は電源を切るためにケータイを耳から話す。ケー
タイには当然電話をかけた相手の名前が表示されている

…ん？『八雲紫』？やくもむらさき、いや、やくもゆかり…”やく
も”！？

すっかり忘れていたが”やくも”とは俺がこっちに来るはめになっ
た謎のURL、「gensokyo.yakumo」だ

「gensokyo」は幻想郷のことだ。間違いない

「yakumo」、もちろんこんな長つたるいドメインがあるわけ
ない。「yakumo」とは八雲。こいつのことだろう

さっきの青年の話では、外の世界と幻想郷を行き来できるらしい。

しかも…『神隠しの主犯』…

これで全て繋がった。おそらく俺を東方の世界に送った犯人はこ
いつだ

俺が東方を批判して、ムカつきでもしたのだろう

「謙也くん、『八雲紫』の写真は…ないかい？」

「え？確か…前撮った集合写真のなにありますよ、どぞ」

写真の中には真ん中に青年が。そしてその回りには色とりどりの髪
や服装をした同じような顔の少女たちがたくさん並んでいた

何人かはやはりどこかで見たことがある顔だ。東方のキャラだから
どこかで見たのだろう

「どれが『八雲紫』？」
「えーっと…こいつです」

青年は写真に写っている一人の人物に指をさした。…画像があらくてよくわからないが、服装や体型は分かった

「はあ…じゃあもう今日はしょうがない、諦めてさっさと寝ますか…。あ、風呂沸かしてきます」

青年はすたすたと風呂場へ行ってしまった。さっきはあんなに必死になっていたくせして…。まあいいけど

「…」

部屋の中に自分一人取り残される。ランプだけではどうしても暗い。
…あ、周りにハエや蛾が集まってきている

外はざわざわと木が揺らめいている。遠くの方にはうつすらと朱色に光る鳥居

部屋の中は、畳、障子、木でできたタンス…

昼間は幻想的で綺麗という感想しか浮かばなかったが、夜になるとまた別の感情が沸き上がってきた

それは…『恐怖』

周りは当然、森。しかも実際に人間以外の生物がいる世界。さらに場所は神社

自然に体が震えてきた。寒いわけではない。気温はちょうどいいくらいだ

とっさに周りを見る。傍から見たらいかにも挙動不審で怪しい人物に見えるかもしれない

靈感が強い…と言われたことは一度もないが、なにか普通じゃない感じが…

「どうしたんすか？」

「うわっ！！」

「えっ！」

青年が戻ってきた。

「ま、まったく驚かさないでくれよ…怖いじゃないか…」

「怖い？」

「ああ、こんな場所で一人になるのは初めてでさ…別段怖がりというわけでもなかった気がするんだけどな…」

三十路のおっさんが情けない…。と思ったら青年から聞きたくない言葉が発せられた

「あ、神社の裏に墓がありますから。たぶん本物の霊だったでしょうねー」

「えええええマジかよおお！！！？？」

思わず凄い声が出てしまった。文にすれば感嘆符2つと疑問符2つくらいつくだろう

「うるさいっすよ」

「…す、すまん」

―

風呂から上がり、晩酌する青年と俺

「あー、やっぱり風呂上りの一杯は格別っすねー」

「おっさんかお前は」

「ははは、おっさんはおじさんでしょうに」

「なんだとー！」

「はははは」

なんだかんだで青年とは友人並みに親しくなれた。まあ、一点を除いてだが…

「ところでおじさん、今日一日幻想郷を過ごしてみてもうでしたか？」

「あ、ああ楽しかったよ。外の世界ではこんな体験できないだろうし」

「でしょう！個人的には紅魔館や地底も行ってみて欲しかったんですけど、お母さんのほうが優先ですしね」

「…」

そう、その事なのだ。正直母さんのことはもつとつでもいい。俺が行ったら助かるというわけではないだろうし

「まあ、もし良かったら外の世界に帰ったら『東方Project』やってみてくださいよ。おもしろいですよー

シューティングが苦手なら格ゲーもありますから。あと、小説や漫画もありますし

あ、でもここで起きたこと他の人に言ったりネットで書いたりしちゃ絶対ダメっすよ」

「あ、ああ」

誰がやるか、せつかくその名前を忘れていたのにイライラしてきた

あ、そうだ。昨日はすぐ寝てしまったが今日は後でネットをやるう
スマホの電池も、殆ど使っていないから充分にあるはずだ。しかも
青年の近くに入れば接続も無問題だ

―そこで…また掲示板に行つて東方厨を煽ろう

だいきゅうわ（後書き）

主人公は日本最初の和歌とされる古事記の須佐之男が詠んだ『八雲立つ』で始まる和歌は知らないようです（もしかしたら知ってても忘れてるかも）

だいじゅわ(前書き)

4日も遅れてしまった…orz 待っていてくれた方(いないと思うけど)本当にすいませんでした
予め言っておきます…次話もたぶん遅れます。すいません

だいじゅわ

布団も敷き終わり、横になる。俺はスマホを出し、ブラウザを起動している。青年は座椅子に腰掛けてパソコンを開いている

回線は…よし、ちゃんと通じる。青年の半径一メートル以内に近づかなければいけないので、かなり青年に近いが

青年の方を向いており、仮に青年が振り返ってもスマホの画面は見え、何をしているかはわからない

その青年は外側を向いており、俺も青年のパソコンは見えない

「さあ、今日の異変の写真を整理するかなー、ふっふふーん」

青年が上機嫌に鼻歌を歌いながら独り言を言っている。俺は、いつも見ている掲示板にアクセスする

「あ、おじさんも写真見ます？」

「いや、遠慮しとくよ」

「そうですか」

速攻で断った。さあ、掲示板を見てみよう…。 ”東方”でキーワード検索、っと

何個かのスレッドがヒットする。その中から適当なスレッドに潜る…

”フランちゃんは俺の嫁！”

”紅魔館組で誰が一番胸があるか”

”小悪魔たんとちゅっちゅしたい”

相変わらずキメエな、全く。一日ネットが出来なかったので、煽り文句がポンポン頭に浮かんでくる

『きwwめwwえwwあんな子供が描いたような絵が良いとかwwお前ら同じ人間として軽蔑するわwww世の中のために氏ねクスww』

送信！やっぱり最高だ。さあ、真っ赤になって反応してくるはず…

” 咲夜さんが一番だろ ”

” P。D長が一番なわけ無いだろ ”

” おい消されるぞw ”

” #このスレは紅魔館メイドによって監視されています# ”

… あれ？反応がない。何故だ？

そうだった、こういうスレは書いている方もふざけ半分で書いているから反応が来づらいんだった。忘れてた

「さあ、写真の整理も終わったしそろそろ掲示板に行ってみるかー」

一番、煽り甲斐があるのは——大真面目に世界観や楽曲を考察している類のスレ——だ

あいつらは、” 東方 ” を真面目に、まるで『何かの宗教の聖典を研究する』かのように必死だから、反応が来る場合が多い

さあ、適当なスレを探して… 潜る

” 幻想郷は、長野県の白馬にあると思う。神主の故郷でもあるし… ”

” え、岩手の遠野じゃないの？マヨヒガやカップ淵からそうとしか連想できんけど ”

” 神奈子たちが守谷神社（＝諏訪大社）を持ってこれる距離ってことで俺は白馬に一票 ”

” え、日本全国がいろいろ混ざってんじゃねえの？ ”

うわっ、ここまで行くと末期だな。ゲームの世界が本当にあるわけ無いだろうが

しかも大真面目だこいつらは。さかのぼって読んでいくと神社がどうこう民俗信仰がどうこう言っている。ゲームと関係無いだろ

『おいおいお前ら本気で言ってるのか？wついにゲームと現実の違いがわからなくなっちゃったかw東方厨はマジで害悪だなw』

送信っ！…送信しながら気づいたが、俺が今いるところって東方の世界だったじゃん…まあ、いいか

おお、釣れとる釣れとる。”アンチは退室してください”、”東方の世界観は実在する民俗信仰などをモデルにしているんですよ”、だと。さいですか

『お前ら東方厨のせいで本物の民俗信仰が好きな人が迷惑してるんだよw可哀想だよなw東方厨百害あって一利無しだなwww』

送信。すぐそこに青年が居るので必死に笑いをこらえる。顔はニヤついてしまっているかもしれないが

ところで、青年もいつの間にか鼻歌をやめていた

お、面白い反応が来ている。”ふざけんなよ。知ってもいないのにただ煽って何が楽しいんだよ。”だってさ。楽しいに決まってるじゃないか

ニヤニヤしながら返信しようとする…と

「おじさん…何やってるんすか？」

「…え？」

さっきまで自分のパソコンをいじっていたはずの青年がいつの間に

か俺のスマホを覗いていた

嘘だ…何も気配もなかったし一体…どうして…？

「そういえば思い出したんすけど昨日の風呂ん中の話では何故か僕の掲示板のやり取りを知ってましたよね」

当たり前だ。俺が煽ったのだから。だが…俺の書き込みと知る術は無いじゃないか…！
それともこれも能力なのか？

「…どうしてバレたか、ですよ？気づいてないみたいですけど、もう一度掲示板を見てみてください」
「…？」

” IP が一緒 w w w w ”

” 自演乙 w ”

” 自分で煽って自分で反応とか…”

どういうことだ…？と思って自分の書き込みとそれに反応した書き込みを見ると… IP アドレスが一緒だった

「僕自身自分の能力がわからないことも多いんですが、どうやら僕の能力でネットに接続した機器は IP が全て同じになるみたいです
ね」

「そ、そんな…」

「僕もびつくりしましたよ。荒らしが居たのでつい反応してしまつたら IP が同じだったんですよ。それで昨日の風呂ん中の話を思い出して

おじさんのケータイを覗いてみたら…ビンゴでした」

青年は怒っているようでプルプル震えている。ああ、これはめんどくさいことになりそうだな…

「すこし貸してもらいますよ」

どういう意味だ？と思っている間に俺の手からスマホが消えていて、いつの間にか青年の手の中にある

そして青年はとっさに書きこみ履歴を確認した。俺は取り返そうとするが

青年は空中へ舞い上がり俺は対抗する手段がなくなり、めんどくさくなり諦めた

「約一日過ごして…幻想郷では数少ない男の知り合いが増えたと思ったのに…。良い飲み友達になれると思ったのに…」

「…」

青年は俺の書き込み履歴を見ながら手を震わせている。俺は特に何の感情もわかない。というかケータイ返してくれ
プライバシーがどうたら言つつもりはないが…

「しかも外来人ですよ？久しぶりに外の世界の話もできたし…。俺、おじさんの母さんが倒れたって聞いたときは本気で心配したんですよ？」

勝手に心配されても困る…

「どうしてこんなことをするんですか！おじさん、東方は詳しく知らないって言ってたじゃないですか！最低ですよー！」

「…」

「何が目的なんすか！答えてくださいよー！」

「…」

「…黙ってんじゃねえよ！！早く答えるよお！！！」

青年はついにタメ語になった。顔は真っ赤になって拳を握りしめて今にも殴りかかってきそうだ

この青年は東方厨ということ以外はほぼ完璧人間だと思っていたけど案外そうじゃないんだな。少し安心した

「おい！！なんとか言えよ！！」

「…そうだよ。俺が書き込んだよ」

これは前から感じていたが、青年と話しているとまるで舞台の上で劇でもやっているかのような感覚がする

どういうことかというところ、青年は話すことがいちいち何かドラマのセリフっぽいからだ

この場合、青年は刑事ドラマの刑事役で俺は犯人役ってところだろうか

「どうして…どうしてそんなことをしたんですか？理由が全く見当つきません。教えて下さいよ！」

「理由って…それは、”東方が嫌い”だからだよ。嘘ついてたのはごめん。なかなか言い出しづらくてさ…」

言い出しづらかったのは本当。というかあの時は早苗さんや青年に頼るしか選択肢がなかった、というよりパニックって考えてなかった

「…本当の理由は何ですか？」

「…え？」

「おじさん、いえアンタが”東方”を嫌いになった理由は何ですか？」

…え？俺が東方を嫌いになった理由…？

これまで心の中では余裕こいていたが少し余裕を見せる暇がなくなる

「おい、さつさと答えるよ！アンタは普通じゃない。特に理由もなくここまで粘着質になるわけない

…なにか理由があるんすよね？話してくださいよ」

「…わかったよ。話してやるよ」

まずは俺が高校生だった時の話だ…

だいじゅわ（後書き）

展開がかなり早くなってしまいましたが、いかがでしたでしょうか
主人公は自分自身を悪い意味で客観視しています。ここま
で来るともう救いようがありません…（自分で言うのも何ですが）

謙也くんは孤児ということもあってか心の奥底では寂しがり屋で、
運が良いのか悪いのか人に裏切られた経験が無いので

こういう状況になるとすぐ激昂してしまうという悪い面もあるよう
です

途中、謙也くんの身体能力が少し明らかになりましたが、弾幕ごっ
こをするかしないか、強いか弱いかについてはご想像にお任せします

あと、何故主人公がいつまでも謙也くんのことを「青年」と他人行
儀で読んでいるのも、ご想像にお任せしますがなにか意味があるん
でしょうね（おい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3390w/>

東方アンチが幻想入り Trash into trash

2011年11月17日20時09分発行